

言語分布の変遷に関して、最後に古代の言語分布について触れておく。東北アジアの古代に関しては、中国正史の東夷伝・北狄伝に当時の諸民族の記述があり、その中に言語に関する記述もある。これらの資料の難点は、言語間で意思疎通が可能であったか（すなわち方言的な関係であったか）を記しているものの、言語形式そのものについての記述がなく、現在分布する諸言語との関係を確定できない点にあり。これらの資料のより詳細な検討に関しては、池上（1989a）を参照されたい。

7.1.3 東北アジアの諸言語の構造と類型

言語研究者にとっては、上述のように分布している東北アジアの諸言語の間に、どのような類似点と相違点がみられるのか、そしてそれはどのような歴史を反映したのか、といった問題が最も大きく関心を惹くところである。ここでは日本語と朝鮮語も視野に入れつつ、東北アジアの言語類型について考えてみたい。

ただ紙幅の都合上、この大きな問題について十分に記すことはできないし、本書の性格上言語学用語を多く用いて記述するわけにもいかない。したがってここでは異同の指標となるキーワードをいくつか示すとともに、その分野の文献を紹介するととどめたいと思う。

まず音声の面からみよう。子音で注目されるのは次のような点である。古アジア諸言語では共通してkとqの対立があるのに対し、アルタイ諸言語には基本的にこの対立がない。しかしたとえばツングース諸語のシベ語にはこの対立がある。舌根による母音調和の影響などから口蓋垂の子音が発達することもありうる。この有無をもって両者の本質的な違いとみなすことはできないだろう。次に松本（2003）が注目している流音の数の問題がある。日本語、チュクチ語などは流音を1

つしかもたないのに対し、アルタイ諸言語、ユカギール語などは2つもっている（ただしネギダル語など、歴史的にrを失った言語もあることは上述したとおりである）。ギリヤーク語の子音の取り扱いを含め、この分布はさらに検討すべき問題であろう。チュクチ語やアイヌ語では閉鎖音に有声無声の対立がなく、1系列であることも注目される。他方イテリメン語には放出音の系列がある。しかし例えば、現在は3系列をもつ朝鮮語もかつては1系列だった可能性があることなどを考慮すると、こうした体系の違いも時間の推移とともに大きく変化しうるものなのかもしれない。

母音の数はアルタイ諸言語やウラル諸語など、母音調和をもつ言語で相対的に多い傾向がある。しかし満洲語など、母音調和のすでに崩れた言語では母音の数が少ないことも稀ではない。母音の数もやはり時代とともに大きく変わりうる。なお母音調和は日本語にもあったとする説がある。チュクチ語などにみられる母音調和は上記の言語のものとは性格が異なっている。

音節構造は単純なものが多いが、イテリメン語とギリヤーク語は複雑な子音結合を許す。逆に、基本的に閉音節言語である北東アジアの諸言語からみれば、閉音節ばかりの日本語は最も音節構造の単純な言語ということになる。ユカギール語やツングース諸語の多くなど、日本語のように母音の長短の対立をもつ言語もあるが、もたない言語も多く、この点もまちまちである。

声調もしくはアクセントの対立をもつ言語は少なく、日本語と朝鮮語の一部の方言、それにケツト語ぐらいである。この点で東南アジアの諸言語とは大きく異なっている。

形態論では、朝鮮語、アルタイ諸言語とならんで、エスキモー語ももっぱら接尾辞によっている点が目される。日本語、ユカギール語もわずかに接頭辞を使用するものの、このグループに入れて考えてもよいだろう。ほかの形態的手法の使用に関してはさまざまであるが、語幹合成を嫌うエスキモー語やツングース諸語と、抱合も活発に行うチュクチ語やアイヌ語が大きく両極端にあるように感じられる。この地域の言語は一般に膠着的

で、一部屈折的である。東南アジアに多い孤立的なタイプは存在しない。松本（2003）が注目しているように、形容詞が名詞的性格を示すか、動詞的性格を示すかも興味深い相違点である。ギリヤーク語やアイヌ語、朝鮮語は徹底して動詞的、アルタイ諸言語では名詞的である。現代日本語の形容詞は用言に数えられているが、かつての日本語では（現代でも琉球方言の一部などでは）名詞的性格を強くもっていたことに留意しなければならない。

日本語、朝鮮語、アルタイ諸言語の多くなどでは、【修飾語-被修飾語】の語順の原理が徹底している。これはいわゆる「アルタイ型」言語（亀井・河野・千野編、1996「言語類型論」の項）であり、文法的な照応はあまり行われない。他方エスキモー語などでは人称や数による一致を重要な統語原理としている。ケツト語では性による一致もある。中間的なのは一部の（特に北方の）ツングース諸語で、人称や格、数による一致がある。文法関係の表示についてみるならば、日本語は典型的な従属部表示型の言語であり、他方アイヌ語は典型的な主要部表示型といえるだろう。ほかではツングース諸語の多くやエスキモー語など、格と人称による二重表示型の言語が多い。エスキモー語などをはじめとして、対象活用をする言語、すなわち目的語の人称も動詞に表示する言語が多く北に分布している。これとも関連して、アイヌ語やユカギール語など、自動詞と他動詞の別に極めて繊細なシステムをもっている言語があることも注目すべきだろう。

エヴェン語などツングース諸語のうち北方の言語、ならびにウラル語族の言語など、格の多い言語がこの地域には多く、世界的にも際立っている。エスキモー語、チュクチ語は名詞に能格があり、ケツト語では動詞の形式に能格的構造がある。

さらに動詞のカテゴリーなど、述べるべきことはまだ多くあるが、東北アジアの言語の類型ならびに系統に関しては、さらに池上（1973）、ボビン・長田編（2003）、宮岡編（1992）、風間（2003）などを参照されたい。

〔風間伸次郎〕

▶ 文献

- アレクサンダー・ボビン、長田俊樹編（2003）：日本語系統論の現在、日文研叢書31 国際日本文化研究センター、572pp.
- 池上二良（1973）：アルタイ語系統論、日本語の系統と歴史、岩波講座日本語12、岩波書店、pp.35-98（池上二良（2004）：北方言語叢考、北海道大学図書刊行会、pp.135-192に再録）。
- 池上二良（1983）：北方諸言語に寄せて、月刊言語、12（11）、38-45（池上二良（2004）：北方言語叢考、北海道大学図書刊行会、pp.3-14に再録）。
- 池上二良（1989a）：東北アジアの土着言語とその分布、三上次男・神田信夫編：民族の世界史3 東北アジアの民族と歴史、山川出版社、pp.125-161（池上二良（2004）：北方言語叢考、北海道大学図書刊行会、pp.15-47に再録）。
- 池上二良（1989b）：ツングース諸語、亀井 孝・河野六郎・千野栄一編：言語学大辞典、第1巻、三省堂、pp.1058-1083。
- 大江孝男（1988）：アルタイ諸言語、亀井 孝・河野六郎・千野栄一編：言語学大辞典、第1巻、三省堂、pp.528-545。
- 大島 稔（1988）：アリウト語、亀井 孝・河野六郎・千野栄一編：言語学大辞典、第1巻、三省堂、pp.508-516。
- 風間伸次郎（2003）：アルタイ諸言語の3グループ（チュルク、モンゴル、ツングース）、及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか——対照文法の試み、アレクサンダー・ボビン、長田俊樹編：日本語系統論の現在、日文研叢書31 国際日本文化研究センター、pp.249-340。
- 亀井 孝・河野六郎・千野栄一編（1996）：言語学大辞典、第6巻、三省堂。
- 栗林 均（1992）：モンゴル諸語、亀井 孝・河野六郎・千野栄一編：言語学大辞典、第4巻、三省堂、pp.517-526。
- 庄垣内正弘（1989）：チュルク諸語、亀井 孝・河野六郎・千野栄一編：言語学大辞典、第2巻、三省堂、pp.937-950。
- 津曲敏郎（1989）：女真語、亀井 孝・河野六郎・千野栄一編：言語学大辞典、第2巻、三省堂、pp.251-253。
- 津曲敏郎（1996）：中国・ロシアのツングース諸語、言語研究、No.110、177-190。
- 津曲敏郎編著（2003）：北のこぼれフィールド・ノート——18の言語と文化、北海道大学図書刊行会、266pp.
- 松村一登（1988）：ウラル語族、亀井 孝・河野六郎・千野栄一編：言語学大辞典、第1巻、三省堂、pp.845-854。
- 松本克己（2003）：日本語の系統—類型地理論的考察—、アレクサンダー・ボビン、長田俊樹編：日本語系統論の現在、日文研叢書31 国際日本文化研究センター、pp.41-129。
- 宮岡伯人（1988a）：エスキモー語、亀井 孝・河野六郎・千野栄一編：言語学大辞典、第1巻、三省堂、pp.896-